

ゆとりば



ゆとりのマンション

日本に現存しているマンションは閉鎖的だ。南に大きな開口部を持たせた同じ「間取り」の住戸を幾度も連続させ、同じ形状のバルコニーを同じ方向へと展開する。その風景はある種、牢獄のような閉鎖間を印象に持つ。そこに生活の豊かさ、人々の賑わい、喜びは感じられない。本計画ではその閉鎖間を解消し、解放感のある「ゆとりのマンション」を目指した。具体的には人々の生活風景や、人々が交流する様子、また商業施設や福祉施設を通じて、子どもたちが無邪気に遊ぶ楽しい風景をまちに映す。そしてその風景は人々の記憶に残り、やがて多くの人々が訪れる施設になることを願う。

また、これからのマンションとして本建物の住居には職場および作業場が隣接されている。「住ながら働く人」もいれば「住ながら商売をする人」、「住ながら趣味感覚で副業をする人」といったように様々な生活様式が生まれることだろう。そういった今までにない新たな生活様式が生まれることで、生活のパリエーションを増やし、様々な生活風景をつくりだした。

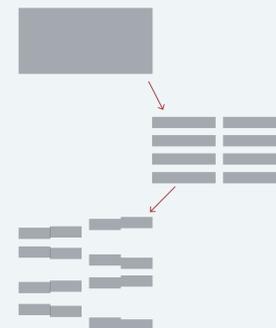
灯と

計画地である藤枝駅北側は薄暗い印象をもつ。駅南は商業施設等が比較的多く、若い年齢層の人々の遊び場になっているのに対して、駅北は俗にいう夜の店が多く、また商業施設もほとんど機能していないため、昼間は人が少ない。そんな駅北に灯を与える。マンションのバルコニーを様々な方面に突き出し、生活の風景を各方面に見せる。その明かりはまちを照らす「物理的な灯」になると同時に、人の行動や風景など、活動の可視化による「感覚的な灯」となり、まちに「ゆとり」を与える。



広がり

各方面にバルコニーを、生活の風景を突き出すべく本マンションは分棟型とした。まず、8つの棟をつくり外壁面を増加した。これにより建物がスリムとなり、すべての住戸が南に開口部をもつ。そしてそこからさらに16の棟に分棟する。外壁面がさらに増え、また棟と棟の間隔を所々広げることで建物そのものの圧迫感、威圧感を和らげ、敷地に「ゆとり」を与えた。棟と棟の開けた間には広場や空中路地をつくり、人々の交流を促し、活動を促進している。



くつろぎ

マンションの下2層は駐車場を覆う山形になっている。これから高層化が進むであろうまちなみに山を設ける。高層化が進むとまちは息苦しさが増し、またオフィスや住宅が密集すれば歩行者が増え、駅とそこを歩きかう人々でせわしない時間が続くことが想定される。そんなまちに山を設けることで特に子どもたちの拠り所をつくり、走り回って遊んだり、座って本を読んだり「ゆとり」のある活動を誘発させる。今まで駅北にはなかった子どもたちの居場所を確保する。

